

東洋文庫所蔵・河口慧海将来蔵外写本 チベット語訳『金剛般若経』と『法華経』について

庄司 史生

1 はじめに

本稿では、河口慧海（1866～1945）によってチベットから将来され、1940年に東洋文庫へと寄贈⁽¹⁾されたチベット語訳紺紙金（銀）泥写本『金剛般若経』 *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rDo rje gcod pa* と、紺紙金銀泥写本『法華経』 *Dam pa'i chos padma dkar po* を紹介する⁽²⁾。

『金剛般若経』と『法華経』にはサンスクリット原典が現存し、現在に至るまで原典研究が進められている。両者は大乘仏教文化圏において広く流布し、ともにチベット大蔵経・カンギュルにも所収されており、カンギュルの系統研究という点からも注目されるものである。本稿で扱う資料はカンギュル所収のものではなく、単独で流布した蔵外文献であるが、完本として現存する紺紙金（銀）泥写本であるという点から、単に原典研究の対象のみならず、文化的側面からも注意せられるべきものであるといえる⁽³⁾。本稿では各資料の概要、また旧蔵者である河口慧海と資料との関わりについて言及するにとどめ、内容研究については今後の研究をまつこととしたい。

『金剛般若経』（請求番号：蔵外-311Aと蔵外-311B）は縦9.0弱×横22.0 cm 程の小さな紺紙金（銀）泥写本（完本）である。東洋文庫には同一名の蔵外文献が他に蔵外-311CからEまであり、全5点が所蔵されている。そのうちAは紺紙金泥写本、Bは紺紙金銀泥写本であるが、蔵外-311C、DとEの3点は版本で、DとEとは全く同一の版本である。従って蔵外文献中に写本2種・版本2種の全4種の『金剛般若経』があることになる。この中から本稿では特に写本である311Aと311Bをとりあげる。

『法華経』（請求番号：蔵外-333）は、縦20.0×横60.0cm 程あり、蔵外

文献の中では比較的大型の紺紙金銀泥写本（完本）である。本資料はすでに本誌『東洋文庫書報』第1号（1969年）に「チベットの写経」（ケツン・サンボ述、森岡康編）と題してとりあげられ、また『東洋文庫の名品』（2007年）等にも紹介されている。この写本には装飾が施された木製の経帙板と紐が付属されている。後述するようにこの経帙版には河口本人による書入れがあり、それによると当初は一夾の中に『法華経』の他にもう1種の経典が収められていたと考えられる。

2 蔵外-311：『金剛般若経』 *rDo rje gcod pa* について

『金剛般若経』という名称は通名であり、しばしば *Diamond Sutra* と英訳されるものである。サンスクリット語の原語では *Vajracchedikā Prajñāpāramitā Sūtra*⁽⁴⁾ である。漢訳には鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜経』（402年訳）をはじめとした7訳が現存し⁽⁵⁾、チベット語訳も *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rje gcod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* として現存している⁽⁶⁾。

先述したように『金剛般若経』は東洋文庫所蔵・チベット蔵外文献中に請求番号（Call Number）蔵外-311として収められている⁽⁷⁾。これにはAからEまでの5点（4種）が含まれている。5点の書誌情報の一覧表を以下に示す。

〔蔵外-311A～E：チベット語訳『金剛般若経』書誌一覧〕

	サイズ（*）cm	葉数	行数	形態	備考
311A	8.7×22.1	56: 1b1-56a3	5	写本	押印**あり
311B	8.7×21.9	47: 1b1-47a5	6	写本	同上
311C	8.4×24.0 (5.5×18.0)	69: 1b1-69a5	5	版本	同上
311D	10.4×43.3 (7.1×38.3)	74: 1b1-74a5	2	版本	3文併記***
311E	10.4×43.3 (7.1×38.3)	74: 1b1-74a5	2	版本	同上

* () 内は版木のサイズ

** 「佛教宣揚會藏書之印」押印

*** サンスクリット文（ランツァ文字）、サンスクリット文（チベット文字音写）、チベット文（チベット文字）の3文併記

通常、サンスクリット語等のインドの言語からチベット語へと翻訳された仏典は、典籍冒頭部にてその原語表記をチベット文字による音訳にて記す。

渡辺章悟博士は、現存するサンスクリット写本『金剛般若経』の経題が、*Vajracchedikā Prajñāpāramitā Sūtra* であることを確認した上で、同経チベット語訳各版のサンスクリットの経題音訳表記を一覧で示し、そこに2種類の経題が見出され、サンスクリットの原典には以下の2種が存在していたことを推定することも可能である、と指摘されている⁽⁸⁾。

① *Ārya-vajracchedakā nāma Prajñāpāramitā-mahāyāna-sūtra*

：チヨーネ版、デルゲ版、ジャンサタン版、ラサ版

② *Ārya-vajracchedikā nāma Prajñāpāramitā-mahāyāna-sūtra*

：東京写本（＝東洋文庫所蔵・写本大蔵経）、ナルタン版、北京版、シェルカル（＝ロンドン）写本、トクパレス写本

以上の指摘に関連して、本稿でとりあげる蔵外-331A～Eのサンスクリットの経題音訳表記を以下に記す。異同箇所は下線にて示す。

『金剛般若経』（蔵外-311A～E）サンスクリット経題音訳表記一覧

311A: *ārya badra tstshe da ka pra dznyā pa ra mi ta nā ma ma hā ya na sū tra*

311B: *ārya badra tstshe da ka pra dznyā pa ra mi ta nā ma ma hā yā na sū tra*

311C: *ārya badra tstsha da ka pra dznyā pa ra mi ta nā ma ma hā ya na sū tra*

311D/E: *ā rya ba dzra tstshe dī ka pra dznyā pa ra mi tā nā ma ma hā ya na sū tra**

*311D/Eは表題紙から経題を採る

上記のように、東洋文庫所蔵本にも①と②の2種のサンスクリットの経題を確認することができる。すなわち、①：蔵外311-A～Cと②：蔵外-311D/Eである。この他に正確には母音 a を長音で記すべきところを単音で記す例がしばしば見受けられる⁽⁹⁾。

なお、『金剛般若経』は伝統的に32節に分けられている⁽¹⁰⁾。それらの所在の対照表を本稿末尾に「表①『金剛般若経』章所在対照表」として付したので参照されたい。

2.1 蔵外-311A

本資料は紺紙金泥写本である。ただし、写本の冒頭部と最終部には他の色も用いられ装飾されている。第1葉表裏、第2葉表、そして最終葉となる第56葉表には赤、青、緑、白も使用されている⁽¹¹⁾。写本表題紙には、河口慧海旧蔵書であることを示す蔵書印「佛教宣揚會蔵書之印」が押印されている⁽¹²⁾。写本末尾第55葉裏5行目で經典本文は終わり、続けてチベット文字で音写されたサンスクリット文「縁起法頌」⁽¹³⁾と願文が記されている。

[1] ye dha rmā he tu pra bha wa he tu nte ṣā nta thā ga to hya
ba dat // te ṣā nytsa yo ni ro dha e waṃ bā dī ma hā shra ma
naḥ //

[2] 'di bris dge bas bdag gzhan 'gro ba kun // sgrib spyad tshogs
rdzogs kun mkhyen myur thob shog / // (蔵外-311A、55b5-
56a3)

[1] 一切の法は因より生じるが、それらの因を如来はまさに説かれた。それらには滅尽があると、偉大な修行者はこのように言われた。

[2] これが書かれた善行によって自と他の一切衆生の障礙が浄められ、資糧が満たされ、すみやかに一切知が得られんことを。

2.2 蔵外-311B

本資料は、青と赤の二重線で枠を描きその中に経文を書写した紺紙金銀泥写本である。各葉表左のマージンには葉番号が付されるが、冒頭の第1葉から第20葉目までは赤、第21葉から最終の第47葉目までは青で記される。また写本冒頭部の第1葉裏と第2葉表には装飾がみられる。經典本文は金文字の他に銀文字で書写される行もあるが、一定の規則で金と銀とが使い分けられているわけではなく、1葉両面を金文字で書写することもあれば、1、3、4、6行目を金文字、2、5行目を銀文字で書写することもある。さらに經典本文を赤で訂正している箇所もみられる。先の311Aと同様に、表題紙には「佛教宣揚會蔵書之印」が押印さ

れている。写本第46葉裏4行目以降には真言と願文、そしてチベット文字に音写されたサンスクリット文「縁起法頌」が付されている。

[1] na mo bha ga wa te // pradznyā pa ra mi ta ye // om̐ na tad
ti ta // i li shi // i li shi // mi li shi // mi li shi // bhi na yan bhi
na yan // na mo bha ga wa te // prad dyaṃ pra ti / i ri ti / i ri
ti / mi ri ti / shu ri ti / shu ri ti / u shu ri u shu ri // bhu yu ye
bhu yu ye sbāhā //

[2] rdo rje gcod pa'i snying po 'di lan gcig bzlas pas rdo rje gcod
pa khri dgu stong bklags pa dang mnyam par 'gyur ro //

[3] ye dha rmā he tu pra bha wa he tunte ṣā nta thā ga to hya
ba dat // te ṣā nytsa yo ni <ro> dha 𑖦 e waṃ bā di mahā shra
ma ṇaḥ //

[4] dge'o // // / legs so // legs so // // / // mangga laṃ //
// (蔵外-311B, 46b4-47a4)

[1] 世尊母なる般若波羅蜜に帰命します。om̐ na tadita / iliśi iliśi
/ miliśi miliśi / bhi nayan bhiayan / 世尊に帰命します。pradtyaṃ
parti / iriti / iriti / miriti / miriti / śuruti / śuriti / uśuri uśuri / bhu
yuye bhuyuye svāhā /

[2] この「金剛能断〔般若〕の真髓」を一遍唱えれば、『金剛能断
〔般若〕』を19000回読むのと等しいことになるであろう。

[3] 一切の法は因より生じるが、それらの因を如来はまさに説か
れた。それらには減尽があると、偉大な修行者はこのように言われ
た。

[4] 善かれ、善かれ、善かれ、吉祥あれ。

チベット語訳『金剛般若経』末尾における真言、願文については、既
に渡辺章悟博士が6本のロンドン写本の調査によって明らかにされてい
る⁽¹⁴⁾。その調査結果と本写本末尾のそれとを照合する限りでは、本写
本はロンドン写本中の No.668と近似している。

2.3 蔵外-311C

蔵外-311Cは版本である。先の311A、Bと同様に表題紙には「佛教宣揚會藏書之印」が押印されている。

ところで、河口慧海が第1回チベット旅行時（1900～02）にラサで入手したチベット文献のリストが、Walshによって1904年に公表されている（Walsh 1904）。このリスト中の No.61に、『金剛般若経』の名を確認することができる。以下に同リストから当該箇所を転載する。

No.61

'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rje gcod pa zhes bya ba
bzhugs so / leaves 69.

9 1 / 3 × 3 1 / 4. Print 7 to 7 3 / 4 × 2 to 2 1 / 4. Five lines. Any bookseller. Price As.8.

A religious book containing the instructions of Buddha given in reply to the questions put by his disciples. It is a book in very general use. (Walsh 1904, pp.167-168)

このリストに記されたサイズや葉数などの書誌情報が、本稿で先に示した蔵外-311Cのそれと一致している。また、本資料の表題紙左上には鉛筆で「62」と書かれている。Walshのリスト番号では「61」であるから一致していない。ただし、Walshのリストに記載される書誌と一致する資料でありながら、リスト番号と一つずれた数字を表題紙に記す資料が数点みとめられることから⁽¹⁵⁾、表題紙に記された数字はWalshのリスト番号と無関係ではなく、リスト作成時に便宜的に振られた番号であると推定される。この点から、蔵外-311Cは河口第1回チベット旅行時（1900～02）にラサで入手された資料であると考えられる。

2.4 蔵外-311D/E

蔵外311DとEとは全くの同版である。両者ともに押印はなく、現在のところ河口本人との直接の関わりを知る手がかりは見いだされない。先述したように、本資料はサンスクリット文（ランツァ文字）、サンス

クリット文（チベット文字音写）、チベット文（チベット文字）の3文が併記されている。写本のマージンはフォリオ表左にチベット文字、同右側表裏には漢字で葉番号を付す。詳細な調査はしていないが、チベット語訳文が他の諸本とは異なる異本の可能性もあり、今後の研究がまたれる。

3 蔵外-333：『法華経』 *Dam pa'i chos padma dkar po* について

これは一般に『法華経』と呼ばれ、英訳では *Lotus Sutra* として知られている。サンスクリット語では *Saddharma-puṇḍarīka Sūtra* である。漢訳には3種の訳が現存し⁽¹⁶⁾、チベット語訳にも *Dam pa'i chos padma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* として現存している⁽¹⁷⁾。チベット語訳からの全訳は河口慧海本人によってなされている⁽¹⁸⁾。その「はしがき」によると河口本人は『妙法白蓮華経』と訳すべきであると説明している。この点については後述する。チベット語訳『法華経』は全27章から成る。蔵外-333におけるそれらの章題とその所在、そして河口慧海による章題の和訳を本稿末尾に「表②『法華経』（蔵外-333）章所在名称対照表」として付す。

本資料のサイズは比較的大型で、縦24.3×横63.8cmである。また、彫刻が施された木製経帙板（縦28.5×横70.5×厚4.5cm）と紐が付属されている。全239葉（1b1-239a3）の完本で、本文は8行体である。紺紙金銀泥写本であり、金文字と銀文字とによって交互に書写されている。

『法華経』（蔵外-333）サンスクリット経題音訳表記は *sad dha rma pun da ri ka na ma ma hā ya na sū tra* である。このように本写本冒頭の音訳表記では、反舌音や母音長音の表記に誤記或いは省略がみられる（*puṇḍarīka* を *pundarika* と表記）。

なお、本写本は最後に翻訳者を記して終わる。

rgya gar gyi mkhan po su len dra bo dhi de dang / zhu chen gyi
lo tstha ba ban dhe ye shes sdes zhus te gtan la phab pa'o // //
bkra shis so // zhal gro'o // (蔵外-333, 239a3)

インドの軌範師 Surendrabodhi と大翻訳師 Ye shes sde が校閲し

て決定した。吉祥あれ。

3.1 付属の経帙板について

本資料には、資料を上下より保護する一組の木製の経帙板とその紐とが付属されている。そして上下の各経帙板の外側となる面には、それぞれ彫刻が施されている。この経帙板は2007年発行の『東洋文庫の名品』にもその写真が紹介されているが⁽¹⁹⁾、既に1917年発行の図録『美術資料 西藏之部』（河口慧海編輯、美術工藝會発行）⁽²⁰⁾にも掲載されていた。この図録は河口が第2回チベット旅行より帰国（1915年9月4日帰国）した翌月の1915年10月8日より6日間、東京美術学校（現東京芸術大学）にて開催された「チベット・ネパール・インド将来品展覧会」における展示品の図録で、1917年7月21日に発行されたものである⁽²¹⁾。すなわち、この図録には第2回チベット旅行時に蒐集された経帙板が「美術資料」として紹介されているわけである。図録に掲載された資料（特に経帙板）の現所在について調べてみると、殆どのものが東北大学に所蔵され、数点のものが東洋文庫に所蔵されていることがわかる⁽²²⁾。それらを一覧にすると以下のとおりとなる。

『美術資料 西藏之部』に掲載された経帙板等とその現所在（『著作集別巻二』pp.178-184より）

図録のキャプション	(頁)	現所在：資料番号	備考
1 三佛二尊の経板彫刻	(178)	東北大学*：河3-010**	
2 八吉祥 七寶の経板	(179)	東北大学：河3-011	
3 八薬師 十六薩埵	(180)	不明	
4 三佛ト二十八佛の経板彫刻	(181)	東北大学：河3-008	
5 三佛二十六佛経板	(182)	東洋文庫：蔵外-334	八千頌般若経の経帙板
6 紺帙金泥	(182)	東洋文庫：蔵外-334	八千頌般若経の経(第49葉裏)
7 経板	(183)	東洋文庫：蔵外-333	法華経の経帙板
8 西藏漆塗金縁経板	(183)	東北大学：河3-012?	
9 経板 習字板 版木	(184)	不明	

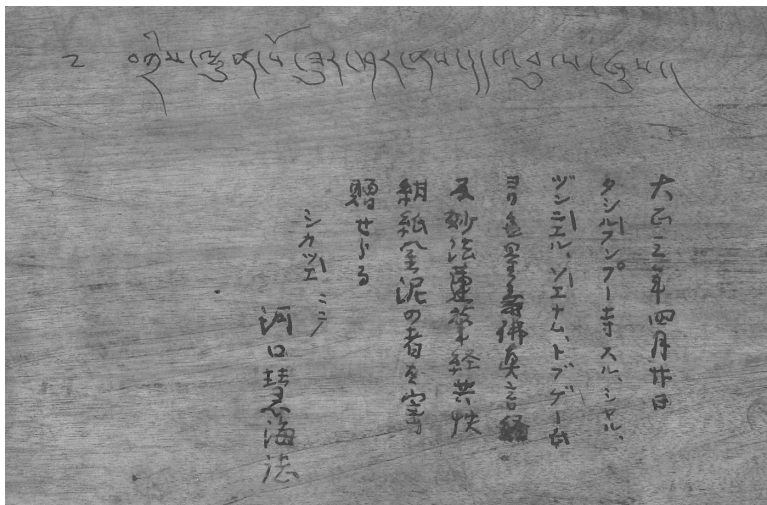
* 東北大学文学部東洋・日本美術史研究室編『河口慧海請来チベット資料図録』（1986年）

** 東北大学所蔵品の整理番号

以上のように、東洋文庫が所蔵するのは「5 三佛二十六佛経板」= 蔵外-334の経帙板⁽²³⁾、「6 紺帙金泥」= 蔵外-334の紺紙金泥写本第49葉裏と「7 経板」= 蔵外-333の経帙板の3点である。すなわち、本稿で紹介している紺紙金銀泥写本『法華経』付属の経帙板が、上記の表中の「7

経板」として掲載されている。

なお、資料の蒐集時期という点に注意するならば、図録に掲載されたこれら3点の資料は第2回チベット旅行時（1914～15）に蒐集されたものであることが明らかとなる。このことは、同経帙板の裏面に墨書された河口本人による書入れによってもまた裏付けられる。この書入れは既に「河口請来蔵外文献解説」（以下「解説」、東洋文庫2002、p.18）に翻刻されている。本稿では原資料を再度確認した上で以下に転載する。



bkra shis lhun po zur shar nas dad 'bul zhus//

大正三年四月廿日
タシルンブー寺スル、シヤル、
ヅンニエル、ソエナム、トブゲー氏
ヨリ無量壽佛眞言經*
及妙法蓮華經共帙
紺紙金泥の者を寄
贈せらる
シカツエ ニテ
河口慧海誌*

*「解説」に「編」とするのを「経」に、「法」とするのを「誌」と訂正する

書入れは2種あり、一つは横書きのチベット文、もう一方は縦書きの日本語である。チベット文は「解説」に示されているように「bkra shis lhun po zur shar nas dad 'bul zhus // (タシルンポのスルシャル氏が心より捧げた)」とある。日本語には入手時期と場所とが明記され、本資料が1914(大正3)年4月20日にチベットのシガツェで入手されたものであることがわかる。

ところで、上記の経帙板への書入れによると、当初は紺紙金泥の「無量壽佛眞言經」と「妙法蓮華經」とを共に寄贈され、両者が同一の帙に納められていたと記している。「妙法蓮華經」とは、本稿でいうところの『法華經』のことである。また「無量壽佛眞言經」は現在、蔵外-336の請求番号を与えられ、別個に保存されている『無量壽宗要經』を指していると考えられる。この資料については後述する。

なお、東洋文庫所蔵の河口将来文献の中には、スルシャル氏より贈られた他の資料もある。それは「解説」(p.19)に指摘されている、蔵外-360の写本『アティシャの伝記』*Jo bo'i rnam thar* である⁽²⁴⁾。また、先の図録に掲載されていた蔵外-334紺紙金泥写本『八千頌般若經』にもチベット文の書入れがあり、日付は明記されないものの、シガツェで入手、との記述があり⁽²⁵⁾、さらに第2回チベット旅行時(1914~15)に蒐集された文献であることは図録への掲載より明らかであるから、蔵外-334は、1914年のシガツェ滞在時に入手されたものと推定することが可能である⁽²⁶⁾。

以上、蔵外-333付属の上部の経帙板に関して述べてきた。次に下部の経帙板について若干ふれておきたい。下部の経帙板には、河口本人によって書かれたと思われる和紙が添付されている。そこにはチベット語(横書)と日本語(縦書)とで經典名が書かれ、さらに次頁のように日本語では資料の整理番号のようなもの(へほの三上)が付されている。このような番号は、河口旧蔵書によくみられるものである⁽²⁷⁾。

先に紹介した経帙板に対する書入れでは本經典を「妙法蓮華經」と記していたが、この添付紙では「妙法白蓮華經」とする。河口慧海本人はチベット語訳『法華經』を訳出するにあたり、経題として「妙法白蓮華經」を採用しその理由を述べている⁽²⁸⁾。従って、1914年にシガツェに

dam pa'i chos padma dkar po'i mdo/			
ほ	へ	妙	紺
の		法	昏
三	蓮	白	金
上	華	銀	泥
	經	泥	

てスルシャル氏より本經典を捧げられた際には經帙板に伝統的名称である「妙法蓮華經」（鳩摩羅什による訳語）と記していたが、後にさらに經題を吟味した結果、「妙法白蓮華經」とすべきと考えるに至り、それと前後して資料整理のために付した上記添付紙には「妙法白蓮華經」と記したものと推定される。

3.2 チベット語訳『法華經』における付加部分について

梶山雄一博士は、チベット語訳『法華經』にはサンスクリット原典や漢訳には見られず、チベット語訳のみにみられる付加部分があることを指摘されている⁽²⁹⁾。すなわち付加部分の有無によってチベット語訳テキストの系統分類の基準とすることができる。本写本には、その付加部分を見出すことができる。従来の研究では本写本がとりあげられたことがなかったため、ここに蔵外-333 (119b8ff) からの翻刻を記す。以下に斜字体で示した箇所がチベット語訳のみにみられる付加部分である。

rin po che'i mchod rten (119b8) de las 'di 'dra ba'i sgra 'byung ste
 /de bzhin gshegs pa rnam la ni sems pa med do // rtag pa med do //
 spyod lam thams cad kyang bstan to // de bzhin gshegs (120a1) pa rnam
 ni phung po dang / khams dang / skye mched las rab tu phye ba ma yin
 no // las dang nyon mongs pa dang / pha ma dang / 'byung ba chen po
 las 'byung ba (120a2) ma yin gyi / sha dang khrag dang chu las rnam
 par 'brel ba ma yin // dbugs nang du rgyu ba dang / phyi rol tu rgyu ba
 dang / srog dang nye bar 'brel ba ma yin no // de bzhin gshegs pa (120
 a3) rnam ni rnam mkha' dang mtshungs te rtag pa ma yin / mi rtag pa
 ma yin // 'on kyang de bzhin gshegs pa rin chen mang bskal ba bye ba
 khrag khrig brgya stong mang por yongs su mya ngan las (120a4) 'das

*pa rtog pa dang / rnam par rtog pa thams cad dang bral ba / sems can
 rnams kyi don gyi phyir sngon gyi smon lam gyi dbang gis chos mnyan
 pa'i phyir dang / sems can yongs (120a5) su smin par bya ba'i phyir
 mthong ste / de bzhin gshegs pa'i sku la ni chung zad kyang rtog pa med
 // de bzhin gshegs pa rnams ni / yi ge 'bru cig kyang ma gsungs so // ji
 ltar (120a6) 'dul ba'i sems can rnams / khams so so ba dang / mos pa
 so so ba'i rnams chos kyi gtam de bzhin gshegs pa las nyan to // gang
 de bzhin gshegs pa de ni / de bzhin (120a7) nyid gang de bzhin de ni
 yang dag pa'i mtha' / gang yang dag pa'i mtha' de ni chos kyi dbyings /
 gang de bzhin dang / yang dag pa'i mtha' dang / chos kyi dbyings de ni
 dam pa'i chos (120a8) pad ma dkar po'i chos kyi rnam grangs so // de
 ltar yongs su dag pa'i de bzhin gshegs pa rnams gang gi tshe gshegs pa
 dang / mthong ba dang / smras pa ni / sngon gyi smon lam (120b1) gyi
 dbang gis bsam pa yongs su dag pa'i sems can rnams la dam pa'i chos
 pad ma dkar po'i chos kyi rnam grangs thabs mkhas pa chen po la bstan
 to //*

*yang rin po che'i mchod rten (120b2) de las sgra 'di gnyis byung ngo
 //*

*bcom ldan 'das shākya thub pa khyod kyis / dam pa'i chos pa
 pad ma dkar po zhes bya ba'i chos kyi rnam grangs 'di legs par
 gsungs pa legs so legs (120b3) so // bcom ldan 'das de de lta'o //
 bde bar gshegs pa de de lta'o zhes bya ba'i sgra 'di 'dra ba byung
 ngo // de nas 'khor bzhi po de dag gis rin po che'i mchod rten
 chen po / nam mkha' bar (120b4) snang la 'dug pa de mthong nas
 / dga' ba skyes shing mgu ba dang / rangs pa dang / mchog tu
 dga' bar gyur te / de'i tshe stan las langs nas thal mo sbyar te /
 'khod do // (蔵外-333, 119b8-120b4)*

以上に対する河口慧海本人による和訳を示す。

かの宝塔よりかくの如き語は出でたり。如来等に於ては衆生なし。

分別なし。総べての行道をも教示せり。如来等は蘊と界と入とより、最もよく分れたるに非ざるなり。業と煩惱と、父母と大生（精液）より生じたるに非ざるなり。肉と血と水により、完全に結びたるには非ざるなり。液が内に入ると外に出づると、命と接して結びたるには非ざるなり。如来等は虚空と等しくして、常に非ず、無上に非ず。然れども多宝如来は多数百千千萬億劫に於て、全く涅槃に入りたり。分別と妄想の総べてより離れたり。衆生等のために前世の誓願の力に依つて法を聞かんためと、衆生を全く成熟するために現はれたり。如来の身に於ては少しも分別なくして、如来等は一字と雖も説き給はざるなり。恰も教化の衆生等が、各自の界と各自の欲望等と法の語を如来に聞いて、如来そのものは実相にして実相そのものは究竟の端なり。究竟の端それは法界なり。実相と究竟の端と法界そのものは妙法蓮華の法数なり。かくの如く完全清浄の如来等は何時か行き給ふと現はるゝとは、説かるゝとは、前生の誓願の力に依つて思想完全清浄の衆生等に、妙法蓮華の法数大巧妙方便を教示せらるゝなり。

またその宝塔よりこの二つの語は出でたりき。

善き哉、善き哉、世尊釈迦牟尼よ、汝はこの妙法白蓮華と名づくる法数をよく説き給へることぞ。世尊よ、それはその如し、善逝よ、それはその如し。といふ所のかくの如き声は出でたりき。次にかの四衆等は、虚空に於て住する所の宝塔を見て喜びを生じて、愉悦、適悦して最も歡喜したりき。その時座より起ちて合掌して立ちたりき。（『法華經：河口慧海著作集 第8巻』 pp.68-70）

上記下線部は河口訳では「衆生なし」とあるが、蔵外-333チベット語訳『法華經』では「思惟なし（sems pa med do）」である。河口訳が用いた底本ではチベット語が *sems can med do* となっていたと考えられる。この箇所についてチベット語訳『法華經』の他の諸本を対照してみると、ナルタン版のみが *sems can med do* としている。河口慧海はこの訳書において翻訳の底本としたカンギユルを明記していないが、この翻訳ではナルタン版『法華經』が用いられたものと考えられる⁽³⁰⁾。

4 蔵外-336：『無量壽宗要經』 *Tshe dang ye shes dpag tu med pa* について
 本資料は本来、蔵外-333『法華經』と同帙に収められていたと推定される『(大乘) 無量壽宗要經』(河口慧海は「無量壽佛真言經」という)である⁽³¹⁾。同經典は敦煌で多量に書写されていたことが知られ、敦煌写本も多く現存しているものである⁽³²⁾。河口慧海はこの原典であるサンスクリット写本 *Aparimitāyur nāma mahāyānasūtra* も将来しそれは東京大学に所蔵されている (Matsunami No.4)。その写本を用いたサンスクリットからの和訳は池田澄達博士によってなされている⁽³³⁾。漢訳には法成訳と伝えられる『大乘無量壽經』(『大正新脩大藏經』第十九卷所収、No.236)と、法天訳(982年前後)『佛說大乘無量壽決定光明王如来陀羅尼經』(同卷所収、No.237)とがある。

本写本は紺紙金泥写本(完本)である⁽³⁴⁾。表題紙には *Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya theg pa chen po'i mdo* とあるが、訳者は不明である。写本のサイズは縦22.2×横65.3 cm、全15葉(1b1-15b4)、本文は8行体である。「佛教宣揚會藏書之印」の押印はない。これには内容が類する文献5種が収録されている。ここでは単にその経題を挙げるにとどめ、内容の研究は今後の研究をまちたい。

① (1b1-7b7)

梵語転写：*Ārya a pa ri mi ta ā yur dznyā na nā ma ma hā yā na sū tra*
 蔵語翻訳：*'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*

② (7b8-10a2)

梵語転写：*Ārya a pa ri mi ta ā yur dznyā na hri da ya nā ma dhā ra ṇī*
 蔵語翻訳：*'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs*

③ (10a2-12b4)

梵語転写：*Ārya a pa ra mi ta ā yur dznyā na bhi ṣi nytsa hri da yā na ma dhā ra ṇi*
 蔵語翻訳：*'Phags pa tshe dpag tu med pa'i snying po tshe'i dbang bskur*

ba zhes bya ba'i gzungs

④ (12b4-14b8)

梵語転写：*A pa ra mi tā*

蔵語翻訳：*Rin po che tshe'i sgrub pa zhes bya ba*

⑤ (15a1-15b4)

梵語転写：*A rya a pa ra mi ta ā yur dznyā na sarba hrīḥ da ya*

蔵語翻訳：*'Phags pa tshe dpag tu med pa thams cad kyi snying po*

おわりに

本稿では、東洋文庫に所蔵されている河口慧海将来蔵外文献中より、紺紙金泥（銀）写本である蔵外-311A、311B：『金剛般若経』、蔵外-333：『法華経』、そして若干ではあるが蔵外-336：『無量壽宗要経』の概要を示し、各資料と旧蔵者である河口慧海との関わりについて述べた。河口将来蔵外文献に関する全体的調査は既になされているものの、各資料に対する個別的な内容研究が充分なされているとは言い難く、今後の研究がまたれるところである。

謝辞

本稿執筆にあたり、東洋文庫所蔵の貴重資料を閲覧させていただきました。また東洋文庫図書部の櫻井徹氏には本稿掲載の機会とご助言を、篠崎陽子氏には河口慧海将来資料についてのご助言を頂戴し、山村義照氏には資料の複写に際しご援助賜りました。記して謝意を表します。

附表

[表① 『金剛般若經』 (藏外-311A～E) 章所在対照表]

三十二分	311A	311B	311C	311D/E
1 法会因由分	2b1	2a2	2b1	2a1
2 善現起請分	3b4	3a4	4a1	3b1
3 大乘正宗分	5b6	4a2	6a3	4b2
4 妙行無住分	7a4	5b6	7b3	7a2
5 如理實見分	8b4	7a1	9a4	8b2
6 正信希有分	9b3	7b1	10a4	9b2
7 無得無說分	13a2	10a1	14a4	13b1
8 依法出生分	14a4	10b6	15b4	15a1
9 一相無相分	16a3	12a1	18a1	17b1
10 莊嚴淨土分	19b3	15a2	22a3	21b1
11 無為福勝分	21a5	16b2	24a5	23b2
12 尊重正教分	22b5	18a1	26a5	25b2
13 如法受持分	23a5	18a6	27a1	26b1
14 離相寂滅分	26a1	20b3	30a2	30a2
15 持經功德分	31b4	25a5	37a4	38a1
16 能淨業障分	34a2	27a5	40a2	41a2
17 究竟無我分	35b5	29a1	42b1	44a1
18 一体同觀分	41a3	33b5	49a4	51b1
19 法界通化分	43a5	35b2	52a1	55b1
20 離色離相分	44a2	36a4	52b5	56b2
21 非說所說分	45a3	37a3	54a3	58a1
22 無法可得分	46a4	38a3	55b3	59b2
23 淨心行善分	46b5	38b7	56b1	60b1
24 福智無比分	47b1	39a2	57a2	61a2
25 化無所化分	48a1	39b2	57b4	62a2
26 法身非相分	48b4	40a4	58b5	63a1
27 無斷無壞分	50a2	41a1	60b1	65a1
28 不受不貧分	50b4	42a3	61a5	65b2
29 威儀寂靜分	51b2	42b6	62a5	67a1
30 一合離相分	52a1	43a4	62b5	67b1
31 知見不生分	53b1	44b3	64b4	69b2
32 応化非真分	54b1	45b1	66a2	71a1

[表②]『法華經』(藏外-333)章所在名称対照表]

	チベット文	河口訳	所在
1	gleng gzhi'i le'u	基礎章	2a2
2	thabs la mkhas pa'i le'u	方便巧妙章	18b8
3	dpe'i le'u	譬喻章	34b1
4	mos pa'i le'u	信解章	52b5
5	sman gyi le'u	藥草章	61a7
6	nyan thos lung bstan pa'i le'u	授記章	72a3
7	sngon gyi sbyor ba'i le'u	過去行章	77b5
8	dge slong lnga brgya lung bstan pa zhes bya ba'i le'u	五百比丘授記章	101a7
9	dge slong nyis stong lung bstan pa'i le'u	阿難陀羅睺羅二千比丘授記章	108b4
10	chos smra ba'i le'u	說法師章	112b7
11	mchod rten brtan pa'i le'u	寶塔示現章	119b1
12	spro bar ba'i le'u	發願章	134b5
13	bde bar gnas pa'i le'u	安樂住章	138b2
14	byang chub sems dpa' sa rum nas 'thon pa'i le'u	從地涌出章	148a8
15	de bzhin gshegs pa'i sku tshe'i tshad kyi le'u	如來壽壽章	158a8
16	bsod nams kyi rnam grangs kyi le'u	福分分別章	165a7
17	rjes su yi rang ba'i bsod nams bstan pa'i le'u	隨喜福分教示章	173a8
18	skye mched drug rnam par dag pa'i phan yon gyi le'u	六根完全清淨利益章	177b5
19	rtag tu brnyas pa'i le'u	常輕章	186b7
20	de bzhin gshegs pa'i rdzu 'phrul mngon par 'du byed pa'i le'u	如來神通章	192b1
21	gzungs sngags kyi le'u	總持真言章	197a3
22	sman gyi rgyal po'i sngon gyi sbyor ba'i le'u	藥王過去行章	200b4
23	sang sang po'i dbyangs kyi le'u	妙音菩薩章	211a7
24	kun nas sgo'i le'u	觀自在完全化身普門章	219b2
25	rgyal po dge ba bkod pa'i sngon gyi sbyor ba'i le'u	善莊嚴王過去行事章	224a3
26	kun tu bzang pos spro bar bya ba'i le'u	普賢勸發章	231a7
27	章名欠	完全附屬章	237a2

参考文献

- 池田澄達1916「梵本アパリミターユル陀羅尼經の校合」『宗教研究』 1
(3)、pp.549-564.
- 石濱純太郎1926「敦煌古書雜考」『東洋学報』 15、pp.512-524.
———1927「無量壽宗要經考補」『東洋学報』 16、pp.223-231.
- 梶山雄一2001「法華經における如来全身」『国際仏教学高等研究所年報』
4、pp.3-26.
- 辛嶋静志2005 An old Tibetan translation of the Lotus sutra from Khotan,
The Romanised text collated with the Kanjur version (1). *Annual
Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology*,
vol.8, pp.191-268.
- 河口 正2000『河口慧海：日本最初のチベット入国者』春秋社（1961年
初出）.
- 河口慧海2001『西藏旅行絵巻・西藏品図録 美術資料・梵文法華經：河
口慧海著作集 別巻2』うしお書店 新潟.
- 2002『法華經：河口慧海著作集 第8巻』うしお書店 新潟
（1924年の複製）.
- 川越英真2005 *dKar chag 'Phang thang ma* 東北インド・チベット研究会
仙台.
- 庄司史生2011 a 「東洋文庫所蔵・河口慧海将来チベット語訳『八千頌般
若經』」『東洋文庫書報』 42、pp.1-18.
———2011 b 「立正大学図書館所蔵・河口慧海将来チベット語訳『八
千頌般若經』」『仏教学論集』 28、pp.1-16.
- ツルティム・ケサン2009 [校訂]『チベット語訳・妙法蓮華經』（日藏仏
教文化叢書11）西藏仏教文化協会 京都.
- 高山龍三2011『河口慧海への旅』勉誠出版 東京.
- 東北大学文学部東洋・日本美術史研究室1986 [編]『河口慧海請来チベッ
ト資料図録』東北大学文学部 仙台.
- 東洋文庫2002「河口請来蔵外文献解説」東洋文庫 東京.
(<http://61.197.194.9/Database/KawaguchiTop.html>)
- 西岡祖秀1980『『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅰ』『東京大学文学部文化

- 交流研究施設研究紀要』 4、 pp.61-92.
- 中村瑞隆1976 *Dam pa'i chos pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen po'i mdo* -1- 『法華文化研究』 2 pp.1-38.
- 御牧克己1984 「大乘無量寿宗要經」 『敦煌と中国仏教：講座敦厚 7』 大東出版社 東京、 pp.167-172.
- 森岡 康1970 [編] [ケツン・サンボ述] 「チベットの写經」 『東洋文庫書報』 1、 pp.33-39.
- 渡辺章悟2009 『金剛般若經の研究』 山喜房佛書林.
- Herrmann-Pfandt, A. 2008 *Die lhan kar ma*. (Philosophisch-Historische Klasse Denkschriften, 367. Band) Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Walsh, E. H. C. 1904 'A list of Tibetan Books brought from Lhasa by Japanese Monk, Mr. Ekai Kawa Gochi.' *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, part I, Vol. LXXIII, No.2, pp.118-177.

注

* 本稿ではチベット文字をワイリー方式によるローマ字にて表記する。

- (1) 河口正2000, p.216ff.
- (2) 東洋文庫所蔵・河口将来蔵外文献については「河口請来蔵外文献解説」(東洋文庫2002)によって詳細に調査されている。ただし、本稿で扱う蔵外-311A～Eなどのような同一タイトルの異本各本については、「解説」では説明が省略されていることもあり、ここにそれを補足すべく新たに紹介する。
- (3) 東洋文庫所蔵・河口慧海将来蔵外文献中には他にも紺紙金泥写本がある。インド系聖典に属するものだけで、本稿で紹介する蔵外-311A；311b：*'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa rdo rDo rje gcod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*、蔵外-333：*Dam pa'i chos padma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*、そして蔵外-336：*Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya theg pa chen po'i mdo* の他にも、蔵外-312：*'Phags pa za ma tog bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*、蔵外-317：*dPal gsang ba 'dus pa zhes bya ba rgyud kyi rgyal po chen po*、蔵外-334：*'Phags pa shes*

rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa がある。蔵外-334については本誌前号にて紹介した拙稿（庄司2011a）を参照されたい。

- (4) Vajracchedikā とは「金剛（ダイヤモンド）のようによく切れる」または、「金剛杵（雷）のようにひきさく」の意（「解題」『般若心経・金剛般若経』岩波書店、1960年より）。
- (5) 七訳とは以下のとおりである。
- ①鳩摩羅什訳（402年）『金剛般若波羅蜜経』（『大正新脩大藏経』第八卷所収、No.235）
 - ②菩提流支訳（509年）『金剛般若波羅蜜経』（同上所収、No.236-A）
 - ③留支訳『金剛般若波羅蜜経』（同上所収、No.236-B）
 - ④真諦訳（562年）『金剛般若波羅蜜経』（同上所収、No.237）
 - ⑤達摩笈多訳（590年以降）『金剛能断般若波羅蜜経』（同上所収、No.238）
 - ⑥玄奘訳（660-663年）『大般若波羅蜜多経』第九 能断金剛分（同上第七卷所収、No.220）
 - ⑦義浄訳（703年）『能断金剛般若波羅蜜多経』（同上第八卷、No.239）
- (6) 『金剛般若経』はチベット仏教前伝期に編纂された仏典目録にもその名を確認することができ、9世紀前半以前には既にチベット語へと翻訳されていたことになる。現存している目録『デ（へ）ンカルマ』*IDan dkar ma* と『パンタンマ』*'Phang thang ma*（ともに9世紀前半の編纂）には次のように記載されている。

IDan dkar ma No. 9: *'Phags pa rdo rje gcod pa / shlo ka sum brgya ste / bam po gcig / ... skad gsar bcad kyis bcos pa /*

'Phang thang ma No. 9: *'Phags pa rdo rje gcod pa, 1 bp.: 300 sl. /*

また、Bu ston Rin chen 'grub (1290-1364) の『仏の教法を明らかにする法の源泉で経宝の蔵と名づけられたもの（*bDe bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod ces bya ba*）』にも次のように記載されている。

Bu ston No.113: *rDo rje gcod pa 1 bp. /*

現存するチベット大藏経経部（bka' 'gyur カンギュル）に収録されている『金剛般若経』については、「チベット語訳『金剛般若経』の諸版」（渡辺章悟2009, pp.333-336）を参照されたい。

- (7) 『金剛般若経』は小部の経典が集められた河口将来の蔵外-337A/B（版本）にも収録されている。

- (8) 渡辺章悟2009, pp.337-338、pp.343-344を参照。
- (9) 実例をあげると次のとおりである。正確には pāramitā (波羅蜜〔多]) とすべき箇所が311-A～Cでは paramita となり長音表記がすべて脱落している。311-D/Eのみは paramitā として末尾の母音 a を正しく長音で表記しているが、それでも第一音節の pa は単音で記されてしまっている。また、正しくは mahāyāna (大乘) とすべき箇所が311Bを除く311A、C、D/Eでは mahāyana と表記されている。
- (10) これは「三十二分」(梁の昭明太子作)と呼ばれ、『金剛般若経』を32節に区分して理解するものである。このような区分を設ける伝承はサンスクリット原典にはなく、またチベット語訳にもないが、一般によく用いられるものであるから、便宜的にここでも採用した。
- (11) 森岡氏によれば、金、銀、緑(トルコ石の粉)が高価で、青、赤、黒は普通の文字、とのことである(森岡1970を参照)。
- (12) 河口慧海は東京根津に「雪山會」を開き、後に「佛教宣揚會」(1918～27)と名称を改めて日曜学校を開いた。なお同会解散後は「在家佛教修行團」と称している。その活動の場となった根津の「雪山精舎」の写真が高山龍三氏によって紹介されている(高山龍三2011, p.287)。
- (13) 「縁起法頌」は単に「縁起偈」、または「縁生偈」ともいわれる。この偈文を仏塔・仏像内に仏舎利の代わりに安置すると「法身偈」或いは「法身舎利偈」とも呼ばれる。『大智度論』卷十一に「諸法因縁生 是法說因縁 是法因縁盡 大師如是說」(『大正新脩大藏經』第二十五卷136c4-5)と出る。
- (14) 渡辺博士は、シェルカル写本(或いはロンドン写本)に、『金剛般若経』が6本(No.653とNo.667～671)所収されていることを指摘した上で、各本末尾に付された真言を提示されている(渡辺2009, pp.345-362)。
- (15) 例えば Walsh のリスト番号80の書誌と一致する '*Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa bsdu pa tshigs su bcad pa* は、東洋文庫所蔵蔵外-310Aである。これには「佛教宣揚會藏書之印」が押印され、表題紙に「81」と鉛筆で書かれている。また、Walsh のリスト番号64の書誌と一致する '*Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa* は、立正大学図書館所蔵・河口将来本である。これにも表題紙に「佛教宣揚會藏書之印」が押印され、鉛筆で「65」と記されている。このような数字のずれについては拙稿で言及したので参照されたい(庄司2011b, p.5)。

- (16) 三訳とは以下のとおりである。
- ①竺法護訳（276年）『正法華經』（『大正新脩大藏經』第九卷所収、No. 263）
- ②鳩摩羅什訳（406年）『妙法蓮華經』（同上所収、No.262）
- ③闍那崛多・笈多訳（601年）『添品妙法蓮華經』（同上所収、No.264）
- 以上の他に部分的な訳出として失譯『薩曇分陀利經』（同上所収、No.265）がある。
- (17) チベット語訳『法華經』の校訂本は『法華文化研究』第2号（1976年）より中村瑞隆博士によってなされ、近年ツルティム・ケサン博士が新たに校訂本を出版された（ツルティム・ケサン2009）。また、コータン出土古写経の翻刻とカンギユル所収本との比較研究が辛嶋静志博士によってなされている（辛嶋静志2005）。チベット語訳『法華經』諸本については同論文に詳しい。
- 現存する目録にも次のように記載されている。
- 'Phang thang ma* No. 43: *'Phags pa dam pa'i chos pad ma dkar po* / 13 bp. /
- lDan dkar ma* No.79: *'Phags pa dam pa'i chos padm dkar po* / shlo ka sum stong dgu brgya ste / bam po bcu gsum /
- Bu ston: No.193 *Dam pa'i chos padma dkar po* 13 bp.
- (18) 『法華經：河口慧海著作集 第8巻』（うしお書店 2002年）として復刊されている。
- (19) 東洋文庫編・発行『東洋文庫の名品』（2007年）の p.303に No.198 「妙法蓮華經」として紹介されている。また、東洋文庫編・発行『時空をこえる本の旅50選』（2010年）の pp.50-51と、その英訳版 *Fifty selected treasures from Toyo Bunko : a journey through the history of the Orient* (2011年) の pp.50-51には、東洋文庫図書館・櫻井徹氏による解説とともに写真入りで紹介されている。なお、同氏より、東洋文庫発行『東洋文庫五十周年展』（1967年）の p.34に No.159 「紺紙金銀泥・法華經」、東京都江戸東京博物館編・発行『世界のなかの江戸・日本—（財）東洋文庫のコレクションを中心に—』（1994年）の p.118に No.223 「妙法蓮華經 1夾」として紹介されていることをご教示いただいた。
- (20) この図録は2001年に『河口慧海著作集 別巻二：西藏旅行絵巻・西藏品図録 美術資料・梵文法華經』（うしお書店）にて復刊されている。ま

た国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」にてオンラインでの閲覧も可能である。

- (21) 「河口慧海・年譜」より（河口正2000, p.300）。
- (22) 東北大学所蔵のものに関しては、東北大学文学部東洋・日本美術史研究室編『河口慧海請来チベット資料図録』（1986年）を用いて確認し、東洋文庫所蔵のものに関しては資料の目視により確認した。
- (23) 経帙版のサイズは70.3×26.9×2.8cm である。
- (24) 「解説」に既に指摘されているように、同資料の第112葉表にはチベット文で「zur zhar mgron ming pas zla (5) tshes (24) nyin phul / (スルシャル・ドゥンという名のもことによって5月24日に捧げた)」（「解説」p.19より転載）とある。これは蔵外-333に対する書入れを考え合わせると、1914年の5月24日と推定される。
- (25) 「解説」（p.19）にチベット文の翻刻と、その和訳が掲載されているので参照されたい。
- (26) 蔵外-334の紺紙金泥写本『八千頌般若経』*'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa* は、本誌第41号にて紹介したものである。庄司2011 a を参照されたい。
- (27) 河口慧海による自身の蔵書に対する整理番号の添付について、筆者は立正大学図書館所蔵・河口旧蔵書の事例を「旅する本」（『今昔蔵書選』立正大学大崎図書館、2010年、36頁以下）に写真とともに紹介したので参照されたい。これらの整理番号は洋装本では背表紙、和装本では表紙に添付されている。例えば、東洋文庫が所蔵する河口旧蔵の洋装本では、Śrīśa Chandra Vasu & Vāmana Dāsa Vasu, *The siddhānta kaumudī of Bhattoji Dikshita*. Allahabad, 1904-1907（請求番号：XII-12-B-f-49）全5冊の背表紙に「ろ4、4」～「ろ4、8」までの整理番号が添付されていることを確認することができる。なお、同書には「佛教宣揚會蔵書之印」が押印されていることが「河口請来蔵外文献解説」に指摘されている（東洋文庫2002, p.4）。
- (28) チベット語訳『法華経』を全訳した河口は、その「はしがき」において次のように述べている。

題して法華経と云ふは、この名称の世人に親好深きに随ふのみ。梵語の題目を羅馬字によつて書せば、Saddharma, puṇḍarīka mahāyāna sūtram 即ち薩（サド）は妙の義にして、達磨（ダルマ）は法なり。

芬陀利迦（ブンダリーカ）は白蓮華にして、摩訶衍那（マハーヤーナ）は大乘、素担覽（スートラム）は経なり。而して西藏訳は全くこれに合し、タムパチョェ妙法、ペツマカルポ白蓮華、テヘクパチェンポイドー大乘経と訳せり。古来漢訳にはブンダリーカを華または蓮華となすも、これにては妙法の譬喩として純潔白洋の妙味を示すこと能はず、原語に白蓮華といふ所に一目瞭然妙法の浄相を観ることを得るなり。これ本書に於て妙法白蓮華経の訳語を採る所以なり。

（河口慧海訳『梵蔵伝訳法華経』「はしがき」p.3より）

- (29) 梶山雄一2001, pp.20-24「付論 見宝塔品のチベット語訳にある付加文について」を参照。
- (30) 河口慧海は『法華経』の他にもチベット語訳の大乘経典を和訳している。『河口慧海著作集第9巻』にはチベット語から翻訳された『勝鬘経』、『大日経』（田島隆純訳）、『無量壽経』、『阿弥陀経』が所収されている。『勝鬘経』以外はみなナルタン版を用いたと記されている。
- (31) なお、蔵外-336に「紺紙金泥西藏経／般若八千偈」と記されたメモが付されていた。おそらく本来これは蔵外-334に付されていたのであろう。
- (32) 同経の諸本と現存状況については御牧1984に詳しい。ところで、『無量壽宗要経』について、『東洋学報』第15号（1926年）と同第16号（1927）に石濱純太郎博士が寄稿している。後者では同経典の「西藏文本」「回鶻文本」「蒙古文本」「満州文本」「漢文本」について言及され、特にチベット本については橘瑞超本、寺本婉雅本等を紹介されている。その中で河口本について言及されていないのは、河口本の東洋文庫への寄贈が1940年であったためである。
- (33) 池田澄達博士は河口慧海将来のサンスクリット写本と高楠順次郎将来の写本とを用いてサンスクリット文を校訂し和訳されている（池田1916参照）。
- (34) 『無量壽宗要経』は本写本の他にも、小部の経典が集められた河口将来の蔵外-337A/B（版本）に収録されている。

（立正大学非常勤講師）